

石柱を祀る神社

ビエンチャンシティ・ピラー神社 (ラオス)

道路の拡張工事に出てきた家々を守る石柱、その数 473 基。

女性スタッフが叩いてくれた大きな銅鑼の響きは、今までにない不思議な感覚でした。



欧州のお城のようなスタイル “柱の神社”



神社の中に積み込まれている数々の石柱



発掘時の写真。専門家と僧侶が立ち合い

ラオスには珍しい“お寺”でなく“神社”

ラオスの首都ビエンチャンに「Vientiane City Pillar Shrine」という直訳すると「ビエンチャン市の柱の神社」があります。ラオスでは殆どの宗教施設がラオス語の Wat (寺) もしくは Temple (寺) ですが、Shrine (神社) というのはとても珍しい表現です。

ここは 2012 年に完成した新しい建物で、ヨーロッパのお城のような尖塔と、濃い緑色の屋根が特徴的で、神社と言っても、日本のように鳥居や参道があるわけではありません。

この宗教施設がお寺ではなく、なぜ神社なのか。それは神社というのは、山、川、木、岩、など、神が宿りその土地を護ってくれる自然物を祀るのですが、ここでも仏様をご本尊として祀っているのではなく、“石柱”を祀っているからなのです。

地中から発掘された数々の石柱

この神社で祀っている石柱というのは、この村の家々の守り神でした。ラオスは後発途上国とは言え、

近年の首都ビエンチャンの発展は目覚ましく、道路の拡張工事がいたるところで進められています。

この村もたくさんの道路工事で地面を掘り起こしたのですが、その時に次々に大きな石の柱が出てきました。その数は何と 473 基。

その当時の発掘の様子は展示されている写真で確認することができます。地中の奥底から出てくる幾つもの石柱。多くは 1m ほどで日本の墓石と同じようなサイズです。そして中には縄文土器のような模様が彫られているものもありました。それらを専門家の立ち合いの元に掘り出し、たくさんの僧侶が供養をしている姿が映っていました。

日本の神道にも
どうぞしん
道祖神という、道に祀られ、村を守ってくれる石像がありますが、意味合いも姿もこの道祖神に近いので



道に祀られ、村を守る。日本の「道祖神」
仏教が広がる以前は、自然物を崇拝の対象として手を合わせていたのです。

現在それらの石柱はこの建物の壁の中に積まれていて、参拝者はガラス越しから見るできるようになっていました。

そして、この石柱を一つのまとめたのが、現在この建物中央に建てられた金色の柱。過度な装飾や彫刻が殆どなく、とてもシンプルな姿が自然物を表していることを感じました。



自然物を表したシンプルで美しい現在の石柱

石柱を祀る風習と不思議な銅鑼

ここに三年務めているというスタッフの女性にお話を聞いてみました。

「昔は一軒の家につき、一つの石を祀る風習があり



座った人の体ほどもある大きな銅鑼



円をさすると延々と鳴り続ける
不思議な響き

ました。石を置くことによって、家を守り、魔よけになり、幸運を招くとされていたのです。

今はそうした風習はなくなり、家を建てる時にその土地を僧侶に拝んでもらうというように形が変わってきています。」

と、日本だったら家を建てる時に神主さんをお願いする「上棟式」や「建前」のような儀式があることを教えてくれました。

そして、女性スタッフが「これはとても珍しいものでよ」と、大きな銅鑼を、かぼちゃサイズのパチで軽くたたいてくれました。

「ゴーン」という音は普通だったのですが、その後が驚きです。叩いた後に中央の円を両手で軽く、子供の頭をなでるようにさするのです。すると「ゴオオン ゴオオン ワンワン ワンワン……」という鐘の響きが両手でさすっている間中、建物全体に延々と鳴り響くのです。音を手で奏でて、四方八方から延々と聞こえるなんてとても不思議な感覚でした。

齋藤 浩司 (さいとう こうじ)

株式会社 B-WAY グループ 代表取締役

互助会から葬儀社を経て 2001 年同社創業。2002 年に葬送支援 NPO 法人を創設。2010 年には宗教法人を新規認証。CSR 活動として、

2007 年、お寺で余ったお供え物を困窮世帯へ届けるフードバンクを設立。2013 年からは東南アジアの貧しい子ども達への生活・教育支援を開始し、現在はカンボジアのスラムで孤児院と幼稚園を運営。活動時に各国の聖地を訪れ、宗教家や現地の人々から文化を学んでいる。東京都新宿区出身。

